

【論文の要約】

論文題目：日本文学における電話の文化史的研究——声のメディアとコミュニケーション——

氏 名：黒田 翔大

短編小説や歴史・時代小説などの一部を除けば、スマホも含む電話が一切登場しない近年の文学作品は極めて少ないであろう。現代の私たちの生活において電話というメディアは必要不可欠であり、その反映として文学に電話は登場してくる。しかし、文学研究において電話が大きく注目を浴びることはさほど多くなかった。そもそも、メディア研究においても電話は看過されやすいものであった。そのため、文学作品内の電話を検討することで、文学研究と電話の文化的研究の両分野における成果が見込まれるというのが本研究の根底にある考えである。

第一部(第一章から第二章)では、電話と未来性に関する検討を行った。

第一章では、遅塚麗水『電話機』を考察することで、電話事業開始以前における人々の電話に対する認識に関して言及した。それによって、電話事業導入に際して人々は単に受動的だったわけではなく、『電話機』に描かれているように様々な問題性が文学において提示されており、電話に対する想像力が働いていたということを指摘した。

第二章では、星新一『声の網』を考察することで、高度経済成長期における電話に対してどのような未来性が付与されていたのかに関して言及した。『声の網』はインターネット社会を予見していたと評価することができる。しかし、そのような単純な捉え方は現代社会における状況を安直に当てはめることに繋がり、同時代性を看過してしまう。そのため、同時代性を踏まえて作品に目を向けることで、現代と本質的に類似した部分も多い社会を想像し得た作品の持つ先見性を改めて評価した。

第二部(第三章から第五章)では、電話と空間／場所に関する考察を行った。

第三章では、日向伸夫と牛島春子の作品を考察することで、「満洲国」内における電話の様相に関して言及した。「満洲国」における電話に関わる先行研究は内地と「満洲国」の接続といった観点のものが主であった。しかし、「満洲国」内に目を向けることで、電話は同じ言語を持つ者同士を結びつけるが、異なる言語を持つ者同士の場合は両者の距離を拡大させることにも繋がる。そのような電話というメディアが「満洲国」内において及ぼした影響を論じた。

第四章では、安岡章太郎『ガラスの靴』を考察することで、占領期における電話の様相に関して言及した。先行研究では大別すると占領期という当時の社会的空間と接收家屋での僕と悦子の空間の二つが注目されており、いずれにせよ「僕」が悦子を諦める理由はクレイゴー中佐という外在的要因にあるとされてきた。しかし、電話によるメディア空間に着目することで、内在的な要因が潜んでいることを提示した。

第五章では、中上健次『十九歳の地図』を考察することで、電話と場所性に関して言及した。作品の同時代の背景として電話網の拡大があり、電話の接続先の大幅な増加によって、一見電話は「脱場所的なメディア」となり場所による制限を受けないかに見える。しかし、電話網が拡大しても、電話を掛けるという行為は場所に対する意識が向かざるを得ないということを指摘した。

第三部(第六章から第七章)では、電話と身体性に関する考察を行った。

第六章では、夏目漱石『彼岸過迄』を考察することで、敬太郎の身体に対する電話の比喩表現に関して言及した。『彼岸過迄』の「結末」において敬太郎は「受話器」というように電話の比喩で評されており、先行研究では敬太郎が物語に対して表面的な関わりしか持てなかったことを示すものと評価されてきた。しかし、指示を一方的に受ける存在として敬太郎は描かれているものの、その一方でそれから逸脱する敬太郎の姿も伺うことができる。そのため、聴き手としての敬太郎は両面性を持つ「受話器」という評価から考える必要があることを示した。

第七章では、推理小説を考察することで、「電話の声」に付与される身体性の変容に関して言及した。電話事業史において声の明瞭度が優れた四号電話機の登場は画期的だったとされているが、それによる影響に関する具体的な記述は乏しい。そこで、推理小説に注目すると、四号電話機普及以後では「電話の声」が犯人特定の手掛かりになり得るが、それ以前ではそのようなことがさほど見られない。その比較から、四号電話機の登場による「電話の声」の身体性の変容を論じた。

以上の考察を通して、電話というメディアが文学においてどのように描かれてきたのか、そして私たちにとって電話がどのようなメディアであるのかの一端を明らかにした。